作者の手によって異世界へ飛ばされました（涙）

タケノコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
作者の手によって異世界へ飛ばされました（涙）

【Ｎコード】
Ｎ２６３７Ｗ

【作者名】
タケノコ

【あらすじ】
作者が異世界トリップものを書きたいという理由でトリップしてしまった可哀相な主人公の物語。

1話

山崎武司、十八歳は明日のデートプランを想像しながら早めにベットに入って就寝した。武司の頭の中は切れ長な目の美少女沙織とのデートで一杯だった。

†

太陽がサンサンと照り付けている広大な草原、そこで武司は覚醒した。武司は

「はあ！？　ここ何処よ？」

『異世界さ。フフン』

「あんた何処にいるの？　異世界？　なんでさ？　あんた誰よ？」

武司は髪を振り乱し動揺した。言葉が早口になっている。

『僕はこの小説の作者さ。僕は君の側にいるよ。君を異世界に連れ込んだのは『小説家にな○るかな』で異世界作品が人気だからだよ』

作者の喋り方は抑揚があってハキハキしていて聞き取りやすい。武司は少し混乱した表情をしていた。

「『小説家○なれるかな』って小説の投稿ができるサイトのことだよね？　じゃあ、俺は小説の中の主人公ってことか？」

『そうだよ。さあ何か面白いことしてよ』

「面白い事って何だよ。作者が考えろよ！」

『僕は才能無いからねー。じゃあとりあえず西に行ってよ。チース村があるからさ』

「西ね……どっち？　それと異世界ものといえばチートだよね。何か能力くれよ」

2話

『君の右手の方が西だよ。能力ねー……よし！　じゃあこれでどう……』

武司は軟らかい草を踏み分け西の方向に歩き出した。彼の着ている服は赤い色のシャツに茶色の半ズボンにソックスにスニーカーだ。

「何々どんな力？　敵を圧倒するような能力かな！？」

『……能力は……洗濯のファンタジスタに早口言葉を極めた者に下着泥棒の達人』

「ええー！？　いらねえ。全部変な能力ばっかりじゃねえか」

『以上。決定！！』

「ええー、そんな能力で何をしろと？」

武司が下生えの草を踏み分け二十分も歩くと木の柵に囲まれた小さな村が見えてきた。しかし村の中央に位置する公園が騒がしい。村民が集まっているようだ。

『早速新しいエピソードが出たね。武司君、君の出番だよ。特殊な能力を使って問題解決するんだ』

武司は仕方なく公園に駆け寄りながらも抗議した。

「洗濯のファンタジスタに早口言葉を極めた者に下着泥棒の達人で

どう解決しろと」

武司は「すいません」と謝りながら観衆を掻き分け公園の中心に踊り出た。そこでは剣を持った青年が茶色い肌で体の至る所から角が生えた身長ニメートル程の怪物が戦っていた。モンスターはなぜか女性用の上下の下着を身につけている。青年が長剣を振るい一閃させた。しかし怪獣の肩に当たるとベキリと折れてしまった。

3話

怪獣は青年に

「私に負けたら結婚してもらうわよ」

青年は真ん中で折れた剣を握りしめながら額から冷や汗を流し僅かに後退した。

「僕は死んでも結婚はしないよ」

容姿端麗な青年は険しい顔付きで言った。青年に迫るピンク色の下着をつけた怪物。

「あらよっと」

武司はそう言いながらブラのホックを巧みに外し上の下着を怪物から盗んだ。さすがチート能力、下着泥棒の達人だ。

「イヤー！　皆見ないでー！」

牝の怪物は悲鳴をあげながら右手で胸を隠した。しかし武司のチート能力はさらに続く。武司は

「とう！」

武司は茶色い怪物の紐パンツの括っている紐を瞬く間に外し奪った。武司に下着泥棒で勝てる者はいないだろう。

「キャー、変態！」

怪物は左手で股間を隠すと走り去った。どうやら村から出ていったようだ。

「ありがとうございました。あの怪物に求婚されて困っていたところです」

と青年は武司に頭を下げた。

「いや、困ってたら助け合うもんだろ（まさか特殊スキルの下着泥棒の達人が役に立つとわ……）」

武司は青年からお礼にと十枚の金貨を受け取った。武司はその後寂れたチース村を探索した。武器屋で鋭い剣を購入し腰にはいた。その後は夜更けが迫っていたのでチース村の旅籠屋に泊まった。屋外からは虫の鳴き声や風がビューと吹く音が聞こえてきた。

4話

「ううっ」

武司は体の上の重みに目を覚ました。朝日が一つしかない宿屋の個室の窓から差し込んでいる。するとベットで寝ている武司の体に跨がった前日の昼間の茶色い怪物が居た。怪物は今朝もピンク色の下着を身につけている。

「あなた武司って言うんでしょ。宿屋のおじさんに聞いたわよ。私あなたの事が気に入っちゃたの。私と結婚してー」と怪物。

体を傾かせ武司の唇に寄ってくる怪物の突き出された口。怪物の口臭はきつい悪臭がした。武司の貞操やいかに。

「作者！　助けろ！　いかにとか言ってる場合か！」

武司は怪物を必死に押しのける。すると武司が怪物を白く清潔感があるベットに押し倒す形となった。怪物は目を細め頬を赤らめながら

「いやん。だ・い・た・ん！」

武司は青ざめたが身を翻し剣と金貨が入った小さな赤い袋を持つと遁走した。旅籠屋の階段を駆け降り扉を押し開け外に出る。ちょっと肌寒い風が武司の肌を撫でる。まだ朝早いためか外に居る人は疎らだ。武司は村を出て草原を走る。生えている草は夜露で若干濡れていた。武司は怪物が追って来ないか後方を確認した。

「作者！　俺は次はどうしたらいいんだ？　というか元の世界へ帰してくれよ。お願いだからさ。それにあんたの名前は何？」

『そうですね、次はさらに西へ向かってノース国という大国に行ってください。何かエピソードが起こるかもしれないので。まだ元の世界へは帰せません。僕の名前はタケノコですよ』

5話

「そうか、タケノコな。分かった。とりあえず西に向かうよ。どうしたら俺の居た世界に戻してくれるんだ？」

『色々やってくれたら帰してあげますよ』

「えー、アバウト」

草原の切れ目には鬱蒼とした森があった。木々や草が生い茂っている。

「タケノコ、この森を西に行くのか？」

『そうです。お願いします』

武司は地面から露出した木の根につまずかないように注意しながら森の奥へ進んでいく。木の枝を掻き分け、藪を通り抜ける。小鳥達が木の枝にとまって「ピーピー」と合唱している。風で梢が揺れる。ついに森の開けた場所に来た。円形に木が切り取られたような場所だ。

「うん？　何か居るぞ」

武司がそう呟くと武司の前方の一歩手前の地面にグサリと矢が刺さった。武司は戦慄した。よく見ると矢を放った相手は下半身は馬でお尻から尻尾が生え上半身は人間という不思議な生物だった。

『ウォーレスですね。ついにバトルイベントですね。頑張って倒してください』

「えー!?　俺、剣もろくに使えないんですけど」と武司。

ウォーレスはニヒルに笑うと

「悪いがそなたの肉を食わさせてもらうぞ。汚れた人間よ」

モンスターのウォーレスは腰にはいていた剣を鞘から抜くと白刃を武司に向け突進してきた。ウォーレスは横切りを放った。

6話

「うわ！」

と武司ひ叫びながら横っ飛びにかわした。武司は焦って言った。

「タケノコ！　このままじゃ殺されちまう！　何か特殊能力かなんかくれよ！」

『しょうがないですね……では剣のスペシャリストを付加します』

「フン！　ハ！」

半人間のウォーレスは声を荒らげながら縦切り、逆袈裟切りをしかけた。武司にはウォーレスの動きがスローモーションのように見えた。武司は二発の剣戟をバックステップでかわすと十文字に剣をないだ。

「クッ！」

ウォーレスはあわやというところで武司の剣を受け止めた。なかなか鋭い一閃だった。

「タケノコ！　なんか相手の動きがゆっくり見えるんだけど！　これなら勝てそうだ」

『頑張ってくださいな。あなたの努力次第でこのお話の面白さが決まっちゃうんで』

武司は駆けウォーレスの側面に回り込み斬撃した。ウォーレスの

茶色い脇腹が裂け出血する。

「グワ！」

そう声を荒げるとウォーレスは血を垂らしながら走り森の奥へと姿をくらました。

「やった！　勝ったぜ！」

武司が鬨の声をあげると森の木々の間から三匹のウォーレスが姿を現した。

「なんだ、三匹なら楽勝だぜ！　うん？」

7話

武司が目を凝らすと二十匹近いウォーレスの集団が姿を見せた。どうやら仲間が攻撃されて怒っているようで表情は険しい。しかも皆弓に矢を構えている。狙いは勿論武司だろう。近くの樹冠に留まっていた色とりどりの小鳥達が騒ぎを聞き付け空へと羽ばたいていった。

『武司さん逃げてください。危険です』

「見りゃ分かるよ！」

武司はウォーレス達の居る逆方向つまり西に駆け出した。武司の背後には矢がヒュンヒュン飛んできて地面や木の幹に突き刺さった。

『武司さん右に急いで移動してください！』

「お、おう！」

武司は素早く移動した。そこへ、今さっきまで武司の頭があった場所に矢が飛来して通過し大きな石に当たって鈍い音を奏でた。武司はそれを見て冷や汗が背中を伝い青ざめた。それから数十分走って足を止めた武司は背後に追跡者が居ないのを確認し

「怖かったー。それにあー、腹が減ったぜ……」

『武司さん、すぐ右にある木の根っこの傍に白いキノコが生えていますよ』

「おっ！　本当だ、食えんの？」

『勿論食べれますね』
「ワーイ！　食べようっと」
武司は小ぶりな白いキノコを採取し、口に運び咀嚼後嚥下した。
『あ、ちょっと焼かないと駄目ですって！』

8話

「え！？　どうなんの俺？　焼かずに食っちゃったけど」

『焼かないと一時間程症状がでますね』

「え、どんな？」

武司は焦った顔で怯えている。武司の傍らにある木立の梢に茶色い鳥が留まって唇を尖らせ「ホーホー」と寂し気に鳴いている。

『脱衣全裸踊り症候群です』

「ええー！　どんな症状やねん……あれ体が勝手に！」

武司はタタンタンタンと足でステップを刻みながらシャツを脱ぎ放り投げた。次いでジャンプしながら靴下とスニーカーを脱ぎ散らし、両手を打ち付けながら半ズボンを脱ぎ、ついにはトランクス――

「キャー！　変態！」

と森の奥から姿を見せた美少女は言いながら武司の左頬を張った。鋭い一撃だった。それに驚いた茶色い鳥が飛び立った。木の枝が揺れ緑色の葉がハラハラと二枚落下した。

「あ、イタ！」

武司はビンタで目を覚ましトランクスを脱ぐ一歩手前で回復した。

武司と顔立ちの整った少女は木を燃やしそれを囲って座った。

「つまり、キノコを食べたせいで服を脱ぎながら踊ってたって言うのね」

「そう。だから変質者じゃないぜ」と武司。

焼かれている木や葉がパチパチと音を発て爆ぜた。辺りには夕焼けの光りが差していた。

9話

『あなたのお名前は？』と作者。

整った目鼻立ちのスレンダーな美少女は肩までの金髪をかきあげながら言った。

「私はルーノよ。これでもハンターなんだから。ってこの姿の無い声は誰なわけ？」

『僕はタケノコと言います。この小説の作者です』

「このっていうことは私はあなたの作品の一登場人物ということ？」

ルーノは魅力的な容姿で頭を傾げながら尋ねた。近くの叢で虫達が「ズーイ、ズーイ」と声を出している。

『そうなりますね』

「フーン、つまり目立ちたかったら武司と冒険すればいいのね」

『そうなりますね』

「わかったわ！　私は武司と冒険するわ」

「え、いいのかよ！　どんな事させられるかわからないぜ」

武司は思案顔で喋った。

「雑多な事があった方が楽しいじゃない。それと武司もハンターになりなさいよ」

「ハンターって簡単になれるのかよ？」

『どこかのハンター商会で登録すればいいだけですよ』

「よし、じゃあノース国に行ってハンターになるぜ」

武司とルーノは草の上に横になり虫や鳥の鳴き声をこもり歌に眠り一晩を過ごした。見張りはタケノコが受け持った。朝になり日差しが武司達を照らした。武司とルーノは覚醒し挨拶をかわすと身支度を整え森を歩き始めた。

１０話

しばらく歩くと体毛が茶色で豚鼻のイノシシのようなモンスター二匹に出会った。つがいだろうか。

『ブーイというモンスターです。突進に注意ですね』

平凡な容姿の武司は腰の剣を抜き放ち特殊スキル剣の達人を発動させる。美少女のルーノも短剣を二本腰の鞘から抜き構えた。

「来るぞ！」

武司はそう言うと駆けてくる一匹のブーイの突進を避けながら縦切りを行った。ブーイの走った道から砂煙りが舞い上がる。武司の一撃は命中しブーイの首が深く裂かれ絶命するブーイ。体が右に傾き倒れるモンスター。

「たあ！」

ルーノは小刀二本でもう一匹の逃げ腰のブーイに走って近づきバツの字に切り掛かった。そのブーイは「クーン！」と切られて鳴いた。そして出血多量の為地面にゴロンと転がった。

「さあ、森を抜けようぜ」

「ええ、そうね」

森を抜けると平地が続いていた。丘の上に登り景色を見ると遠くに都市を囲う城壁とその周りに開墾された畑が見えた。赤や緑の野

菜や果実と思しき作物が実っていた。平地を歩いていると黒い肌、鋭い牙、六本の手足を持つ全長一メートル程のモンスターと鉢合わせした。

『ジャイアントアーンですね。毒を持っているので噛まれたら危険ですよ』

11話

大きな瞳に高い鼻、美しい輪郭のルーノが小刀を抜剣しジャイアントアーンに切り掛かる。片方の目を切られ血を流し怒髪天をつくジャイアントアーン。モンスターはテキパキした動きでルーノを押し倒し馬乗りになった。そしてルーノの首に狙いを定め噛み付こうと口を開いたところで武司が剣をジャイアントアーンの胸に深々と突き刺した。

「どうだ！　でかいアリめ！」

青い血をだくだくと流しながら苦しそうに沈痛な鳴き声をあげるジャイアントアーン。その後ジャイアントアーンは後退りルーノから離れて地面に突っ伏した。土煙りが舞った。そしてピクピクと体を痙攣させやがて動かなくなった。

「大丈夫かルーノ？」

そう言いながら武司は横になっているルーノに左手を差し出した。ルーノはその手を掴むと起き上がった。

「ありがとう武司。助かったわ。お礼に私の胸を五分間揉んでいいわよ」

「え！？」

武司はそう言われ赤面しながら恐る恐るルーノの標準サイズの乳房に両手を伸ばそうとした。

「嘘よ。エッチね」とルーノは意地悪く笑った。

それからも何体か魔物を倒しつつ徒歩で進んだ。すると西にノース国の城門が見えてきた。人々が審査されながら出入れしている。城門は四角い石を積んで造られ見上げる程高かった。

12話

様々な鎧を着込んだ人々も居れば商人だろうと思える荷車を引く人や旅装に身を包んだ人や一般人も居た。門の出入口で数人の鎧兜を着込んだ番兵によって入国審査が行われていた。武司とルーノが番兵に近付くと門番と思われる兵士は言った。

「名前は？」

「俺は武司でこっちがルーノだ」と武司。

ニヤリとほくそ笑んだ番兵は

「入りたければ合言葉を言え」

『空は青く海も青い』

武司達を困らせようとした兵士であったが武司にはこの世界では神とも呼べる作者が味方についていた。番兵は悔しそうな顔で辺りを伺うと

「さっきのはお前が言ったのか？」

「え、ああそうだ」と武司。

「入っていいぞ」

武司とルーノはノース国に入国した。ノース国の大通りには店舗や露店が軒を連ねていた。威勢よく商品を宣伝したりたたき売る商人の喧騒がどこもかしこから聞こえてくる。どの店にも客がついて

いて繁盛しているようだ。可憐な美少女ルーノは武司の手を握ると

「こっちにハンター商会があるわ」

ルーノは武司の手をぐいぐい引っ張りハンター商会へと導く。大通りの最奥にあった建物に「ハンター商会」という簡素な看板がぶら下がっていた。武司には異世界の文字が読めた。

13話

「さあ着いたわよ……あれ、騒がしいわね」

『新しいエピソードですね。盛り上げてくださいよお二人さん』

ハンター商会の前では坊主でハンドアックスを持つ男とハルバートを手にした青く長い髪のグラマーな美女が口論していた。そのスタイルが良くパッチリした大きな目の女は

「あはん、ハンターの仕事を手伝ってくれたら仲良くしてあげると言っただけよ」

筋肉隆々の坊主の男はハンドアックスをブンと降りながら苦々しい表情で言った。

「そんなのは詐欺だ。協力したら付き合ってくれるもんだと思ってたのに！　許せん」

ハンター商会の周囲には騒ぎを聞き付けた野次馬が集まりヒソヒソと話し始めた。坊主の男はハンドアックスを振り上げ端正な顔立ちの女に迫る。「ガキン」と金属同士がぶつかる音が辺りにこだました。

「おっさん！　女を攻撃するなんて最低だぜ」

武司がグラマーな美女の前に割って入りハンドアックスを剣で防いでいた。

『楽しめる展開になってきましたね。この調子でこの物語を面白くしてくださいな』

坊主と武司は戦闘を繰り広げ始めた。武司は特殊スキル剣の達人により坊主の斧の攻撃を巧みにかわしたり受け止めながら徐々に相手をハンター商会の壁に追いやっていく。

14話

武司は袈裟切りを放った。

「くっ！」

なんとか体を反らして避ける眉毛が太い坊主の男。武司が左手で坊主の男のハンドアックスの柄を握り奪い取った。

「まだやるかい？」

武司はバスターソードを坊主の男の首元に突き付けた。

「ひい！　分かった俺の負けだよ」

武司は片手斧を坊主の男に渡し美女に話しかける。

「大丈夫だったか？」

「あはん、ありがとう。あなた中々強いわね」とグラマーな美女。

その時坊主の男がハンドアックスを武司の頭に向けて背後から一閃させた。武司は「ビュ」という斧が風を切る音にきずき振り返るがハンドアックスの方が素早かった。武司の頭に片手斧がヒットする……瞬間にルーノが二本の短剣をクロスさせ防いでいた。

「武司、油断しすぎよ」

ルーノはそう言いながら片手斧の男の頬を切った。鮮血が飛ぶ。

「くっ！」

坊主の男は血を流しながら走って撤退した。グラマーな美女は「フフフ」と笑いながら自己紹介した。

「あはん、私はサリナよ。よろしくね。あなた達もハンターなの？」

「これからハンターになろうと思っているところだ」と武司。

15話

「私はもうすでにハンターよ」とルーノ。

「あはん、なら助けてくれたお礼に同行してもいいかしら？」

『新たな仲間の登場ですね。登場キャラが多い方が良いので仲間にしてあげてください』

「あはん、この声は誰かしら。何処から聞こえてくるのか謎だわ」

揉め事が鎮静化されギャラリーが一人また一人と去り静かになる。

一つ咳をして

『僕はタケノコと言います。この小説の作者です』

「あはん、この小説って……面白い人ね。ところで私はメンバーに入れてもらえるのかしら？」

「いいぜ、タケノコもああ言ってることだし」

「戦力の増強は望ましいことよね」とルーノ。

それから二階建ての瀟洒なハンター商会の扉を押し開き中に入っていく三人。中には入口の左手の壁に大きな掲示板とそこに貼られた数百枚の依頼書があり、一番奥に受け付け、そして真ん中に背もたれの無い長椅子が五個あった。屈強そうな男達が掲示板を見たり椅子に座り依頼書を入念にチェックしている。所々に女性のハンターの姿も目に留まった。武司達は一時間程ハンター商会ノース支部

に逗留した。

「ハンターになりたいんだけど……」

と武司はシャツに半ズボン、腰に剣をはいている姿で受け付けのお姉さんに尋ねた。受付嬢は横の棚から一枚の紙を取り出しペンと共に武司に渡し

「この書類に必要事項を記入してください」

必要事項には名前や年齢、使用武器等といった欄が散見された。それを書き終えると武司は書類を受付嬢に渡した。そしてその日武司はハンターになったのだ。

『おめでとう武司さん。これからはハンターの仕事をバリバリこなしてこの作品を盛り上げてくださいね』

「タケノコ、分かったよ。そのかわりこの世界からいずれは帰してくれよ」と武司。

『はいはい。たぶん（小声）』

16話

武司達は初めてのハンターの仕事に出向いていた。場所はノース国の西にあるメイプ森だ。

「草木が邪魔だなー、タケノコ、作者なんだから何とかしてよ」

武司を先頭に整った容姿のサリナとルーノが続く。武司は生い茂った草を踏み分け、木の根に躓かないようにしながら節くれだった木々の間をぬうように進んでいく。

『頑張って森を進んでください。その程度は我慢してください』

一陣の風が吹き木々の樹冠が揺れた。木の葉が舞い落ち小さな鳥達が梢から空へと飛び立った。

「あはん、今日は暑いわねー」とグラマーなサリナは呟いた。

急にメイプ森の中の温度が下がって涼しくなった。

『あ、気温を五度下げましたよ。いかがですか?』

「あはん、あら涼しくなったわ。ありがとう作者さん」

「おい! こら! タケノコ、人によって態度が違わないか!?」と武司。

『……』

「え、無視かよ！」

『あ、ほら今回の目的のモンスターが見えてきましたよ』

武司達は木々の間隔が広い場所にやってきた。地面には直径三十センチメートルぐらいの赤い実が幾つも落ちていた。その実はモンスターで口がありギザギザの尖った歯が生えている。そのモンスターは武司達を見ると襲い掛かってきた。

17話

「こいつらがプルアだな」

「そうよ、プルアを興奮させると普通の果実になるの」とスレンダーなルーノ。

「なら、これでどうだ！」

武司は一匹の赤いプルアに対し両手で口と目の皮を引っ張り変顔をした。残念な失笑をかう変な顔だった。武司は言った。

「テケテケテケ！」

破顔一笑した武司の正面のプルアは体を左右に揺すりながら

「ワハハハハ！　ハハハ……」

武司に対面するプルアは笑い終えると「ポン」と音をたて赤い果実に姿を変えた。口も鋭い牙も無くなっていた。サリナの周りには十匹近いプルア達が取り囲んでいた。サリナは胸元の第二ボタンまで外し両腕で巨大な胸を寄せ、しゃがみ豪勢な谷間を披露し

「あはん、私のバストはどうかしら？」

十体近いプルア達は興奮したのだろう体を一瞬ピンク色に変え「ポン」と音をたて赤い実に変わった。森の梢が大きな鳥が留まったため僅かに揺れた。その鳥はプルアをじっとみている。食べたいのだろうか。

「あたしだって色気でやってやるわよ」

ルーノはそういうとサリナと同じように上着の第二ボタンまで外し胸を寄せしゃがんで三匹のプルア達に胸を見せ付けた。

しーん。

『どんまいです。ルーノさん』

18話

「なんでよ！　少しは興奮しなさいよ！」

ルーノはそう言うと恥ずかしかったのか頬を赤く染めそっぽを向いた。武司達は依頼の果実に変身した赤い実プルアをいくつか持ち帰った。武司達が居なくなると先程の大きな鳥が木から地面に降り残ったプルアを啄み始めた。

†

武司達パーティーはノース国の旅籠屋のベットで眠り一夜を過ごした。柔らかい夜具、そして開け放たれた窓から吹き込む爽やかで気持ちいい夜風に三人共安眠した。

『この作品を盛り上げるには……うーむ……そうだこれにしよう！』

†

武司とサリナとルーノは当然真っ白なベットで目覚めるはずだった。しかしさらさらな砂が集まった海岸、浜に打ち寄せる波。塩気を帯びた潮風。三人はそんな砂浜で覚醒した。

「って！　ここどこやねん！」

武司は現状に不満を抱き突っ込んだ。武司の頬にはよだれと細やかな砂が付着している。サリナとルーノは目を擦りながら欠伸をし辺りの様子を伺っている。キョロキョロ顔を振る美女二人。

『さあ、皆さん、この作品のためにサバイバル生活をしてください』

「いきなり!?　無茶じゃないか!?」と武司。

『サバイバルといったら狩猟ですよね。さあ、狩りに行きましょう』

19話

武司は逡巡して

「無視ですかい……分かったよ。やるよ」

「あはん、サバイバルって面白そうね」

「あたしも一回やってみたかったんだー」

サリナとルーノが言った。三人は砂浜に置かれた武器を持ち砂浜近くの森に入った。

『皆さん、この森にはヤッカルと呼ばれる動物がいてその肉はかなり美味なんですよ』

武司達三人が居る前の藪から青い肌に頭に角を生やした四本足の動物が飛び出した。武司達は武器を構える。武司は弾んだ声で

「あれがヤッカルか？」

「あはん、確かに美味しそうね」とサリナ。

『いや違います。あれはハッカルと言って体の中に毒を持っています』

「なんだよ！　喜んで損したぜ」

武司達は木々に目印を付け木と木の間を通り生い茂った草を踏み

越え進む。草木を横目に歩いた先には開けたお花畑があった。そして中央には金色の泉がある。

『武司さん達運が良いですね。あの泉の液体はコチョですよ』

「何コチョって？」

ルーノの質問に

『言うなればとても甘美で濃厚な水ですね』

武司は花畑を踏みながら進みコチョの泉の傍に来ると膝を折って両手で金色に輝く液体をすくった。ドロドロしている。甘い臭いが鼻孔をくすぐる。

20話

「毒とかはないんだよな？」

『はい、無害です』

「ズズー」と黄金の液体を飲み込む武司は目を見開き

「甘い！　しかも美味！」

「あはん、そんなに美味しいの？」

サリナが右手でコチョをすくい飲んでいるとルーノの悲鳴が聞こえた。ルーノの方を向く二人。そこにはルーノとルーノの首に尖った石を突き付ける二人の黒人が居た。彼らは腰に獣の皮をまいて顔に白い粉で不思議な紋様を描いている。二人とも男だ。その黒人達は何か喚いている。

『原住民ですね。……ふむふむ……神聖な泉の水を勝手に飲みやがってだそうです』

二人の原住民はタケノコの声の発生源を探し顔をあちこちに向けた。

「ツルマケタ……カメカッタ？」

と言う原住民の声にタケノコは答えた。

『カメクッタ、カメクッタ』

「なんて言ってるんだタケノコ」と武司。

『どうやら僕を神様だと思ってくれたみたいですね』

「ルーノを助けてやってくれよ」

『もちろんです。カルボナーラマイウー』

タケノコの姿無き声を聞くと黒人二人はルーノを解放し武器を手放しひざまづいて土下座して

「バクニュウ、デパフパフ」とタケノコを崇拝した。

21話

そして武司達三人は原住民達と手を取り合い生活していくのでした。そして二十年の年月が流れ――。

「こら！　タケノコ勝手な進行止めろ！　二十年も経ったら俺おじさんじゃねえかよ！」

『はいはい、すいません。真面目にやりますよ』

武司は性転換され女としての人生を歩む――。

「って！　またかよ！　女の人生なんて歩まねえから！」

武司達は作者の手によりノース国の宿屋内に戻ったのであった。

「よしよし、戻ってこれたなー」

しかし安心したのも束の間武司達三人は急激な目眩に襲われ綺麗に掃除がいきとどいた部屋の床に倒れ伏すのだった。

「く、くそ、何する気だ……くそタケノコめ！……うっ」と武司。

「あはん、頭が痛いわね」とサリナ。

「くっ！」とルーノ。

†

武司達は三人はビュービュー吹く風の音に目を覚ました。そこは雲が幾つも漂う空だった。

「うわ！　高いぜ！」

武司はぶつくさ言いながら俯せに落下していた。ルーノとサリナも武司と共に急降下している。ここは正真正銘の空中だった。どんどん降下していく三人。残り千メートルぐらいで地面に到着するだろう。待っているのは死だ。

『緊張感を出したくてこんな風にしてみました』

22話

「殺す気か！？　いい加減にしろ馬鹿作者め！」

地上の草原がくっきり見え始めた。残り五百メートル。

『そんな事言うんだったらこのままにしちゃおうかなー』

草原の草が風で揺れるのが視認できる距離まで来た。残り二百メートル。

「ゴメン、ウソウソ。だから助けてくれよ！」

「本当に死んじゃうよ」とルーノ。

「あはん、笑えないわね」

地面まで数メートル――そこでカッと閃光が光ったかと思うとそこはノース国の宿屋の部屋だった。武司達は床に座っていた。

『どうでした？　緊張感でてたでしょう？』

「でてたけど色々間違ってると思う」と憤っている武司。

「あはん、でも落下するの気持ち良かったわよ」

「あ、私も」

サリナとルーノは上空の空気抵抗でボサボサになった髪をくしでといている。武司は顔色が悪く気分も悪そうだ。空からダイブする

のがよっぽどこたえたのだろう。武司は真っ白な清潔感溢れるベットに腰掛けた。武司達が居なかった間に部屋は掃除されていたようで綺麗だった。タケノコは弾んだ声で話始めた。

『次目を開いたら……どうしようかなー？』

姿は見えないがタケノコの表情はニヤついていそうだ。

「こら！　こんな恐いのは二度とごめんだぜ」

『はいはい、自重します』

23話

『皆さん起きてください。冒険の時間ですよ』

まず武司が体を揺らし起き上がった。

「ここどこだ？」

『北の悪魔カイザーの城内の玄関ホールです』

武司の正面には二階へ上がるらせん階段があり一階の左右に二つの扉がある。豪奢な造りの城だ。床には赤い絨毯が敷かれ天窓からは太陽の光りが差し込み城内を照らしている。

「あはん、また強引な事したの？」とサリナが立ち上がった。

『あ、はいすみません。強敵と戦うのっていいかなーと思ってですね』

「仕方ないわね。でも北の悪魔って確か魔物上位種のハスナよね」

ルーノが辺りを警戒しながら尋ねた。何の気配もしない。金色のらせん階段を凝視するルーノ。

『そうですね。強いと思いますけどいざとなれば僕がいますんで大丈夫ですよ』

「よし探索しようか。まずは右の扉からだ！」

武司達一行は静かに足を忍ばせながら一つの扉の前に来た。茶色い両開きの扉で二つのドアノブがついている。武司はドアノブを回し恐る恐る扉を押し開いた。中には槍や剣、盾に鎧そして大きな金色の宝箱が一つだけあった。松明が中心にありよく燃えている。

「お！　宝箱じゃん。ラッキー。開けてみよっと」

24話

武司は宝箱の蓋を押し上げようとした。しかし開かない。鍵がかけられているのだろう。

「あはん、タケノコさん何とかならないかしら？」

サリナがバルハートを右手に持ち左手を腰にあてながら質問した。

『任せてください、サリナさん。てい！』

宝石がちりばめられた宝箱が「カチャ」と音を発て錠が開いた。

「さすが作者ね」

『エへへ』

ルーノが腕を組んで褒めたてる。辺りは静寂に包まれている。窓の無い部屋で武司はそっと宝箱を開いた。中には何が――

「ブー！　ブリュ！　ブフ！　ブフー！」

「くっせー！　屁の臭いだ、ウエー！」

宝箱は恐ろしいトラップだったようだ。しかもオナラの。宝箱が空なのを確認すると武司は宝箱の蓋を閉じた。

「あはん、武司大丈夫？」

「え、あー、臭かっただけだぜ」

また玄関ホールに戻って来た三人は西側の扉に向かって歩いた。
城内はとても静かだ。

『そう言えばハンター商会から幹部である五鬼のルナハがこの城に先に潜入しているようですよ』

「五鬼って何だ?」

『二つ名ですね。ハンター商会で上から三つ目の実力者に与えられます。五人いるんです。強力な心牙の使い手ですよ』

25話

「あはん、心牙って何かしら？」とサリナ。

『心牙は四属性あります。強牙……つまり剣の切れ味を上げたりするや、現牙……無から有を生み出したり、変牙……AをBに変える。最後に無牙……相手の動きを見切ったり、相手の予想外の攻撃ができる。この四属性の総称が心牙ですね』

西側の扉はネズミ色で頑丈な鉄製の扉だった。二つも鍵がかかっていたがタケノコにより開錠された。ゆっくりと押し開くサリナ。開いた部屋の中には茶色い肌に尖った爪と牙、長い尻尾に鋭い目をしたモンスターが何百匹も居た。モンスター達は暴れたり喧嘩をしたり叫んだりしていた。広大な部屋だった。松明が幾つも燃えている。

『ゾルですね。危険なモンスターです！　扉を急いで閉めてください！』

扉を敏速に閉めたサリナだったが一匹だけ四本足で走り部屋の外へ身をおどりだした。扉は「ガチャリ」と鍵が閉まった。

「チッ！」

武司は身の丈ニメートルはあるゾルに剣で切り付けた。ゾルは武司の放った一撃を白い大きな爪で受け止める。サリナがバルハートの斧の部位で斬撃を浴びせた。ゾルの背中に直撃しそこから赤い血が流れる。ゾルは「グー」と声を上げたが怯まず武司に四本足でダッシュし体当たりをぶちかました。

26話

「グワ！」

と武司は沈痛な声を上げながら白い壁に背中をぶつけた。

「てい！」

サリナが二本の小刀で四度ゾルの胸を切り裂いた。ゾルは僅かに後退した。そこへサリナのバルハートが一閃した。ゾルの頭部が飛んだ。ゾルの肉体が首から血しぶきをあげながらばたんとまえのめりに倒れた。首をはねたのだ。地面に落下しコロコロと転がったゾルの頭は口と目を大きく開いていた。

「あはん、怪我は無い武司？」

「大丈夫？」

心配するサリナとルーノ。武司は床に腰を下ろした状態でうずくまり「うーっ」と唸っている。

『背骨が折れたみたいですね』

「あはん、何とかならないかしら？」

『余裕です。任してください。たあ！』

武司は健全な体に戻った。

『武司さんどうですか？』

「あ、あれ痛くなくなった。流石作者だな。作者が味方って無敵じゃね」

「あはん、確かにそうね。負ける気がしないわ」

「じゃあ二階を探索しましょう」

ルーノの言葉に三人は螺旋階段を一段一段昇っていく。手摺りは綺麗に磨かれツルツルしていた。掃除が行き届いてるようだ。階段を昇ると左右に通路があり所々に扉が見えた。武司達は左手の通路を歩き始めた。武司達の鼻腔を美味しそうな臭いがくすぐった。

27話

武司達が佇むすぐそばの部屋から煙りが漏れていた。料理を作っているようだ。献立はなんだろう。分厚いステーキや煎じた薬草を入れたスープだろうか。周辺に漂う匂いからはたいそうなご馳走が想像された。改めて良い香りだと武司は思った。グーと武司の腹が鳴った。

「つまみ食いしていかね？」

「あはん、カイザーを探すのがさきでしょう」

武司は仕方なく良い臭いの部屋をあきらめ歩を進めた。武司達はつきあたりの部屋の扉を押し開けた。中は黄金色の絨毯が敷かれ壁には美しく色鮮やかなタペストリーが飾られている。天井には巨大なシャンデリアがあった。そして二段上に立派なひじ掛け椅子が置かれその上に全身黒い肌、赤い瞳に額からは角を生やしたハスナがいた。カイザーだろう。彼はひじ掛けに肘をつきその手の上に顎を乗せリラックスしている。余裕しゃくしゃくのようだ。

「ようこそ！　久しぶりの客人だ……用件は私の討伐かね？　うん？」

カイザーはクスクス笑いながら問い質した。カイザーからは不気味な威圧感が溢れている。流石魔物の上位種だけのことはある。並の手練ではないだろう。

「そうだぜ！　勝負！」

武司はそう言いながら駆け椅子にもたれているカイザーに切り込んだ。

28話

しかし切れたのは豪奢な椅子だけだった。椅子は背もたれが縦に切断されていた。武司はスキルの剣のスペシャリストを発動させた必殺の一撃だったのでかわされたのは意外に思い動揺した。カイザーは「ククク」と笑った。武司の背後にカイザーは居て武司の背中を押した。バランスを崩し椅子に倒れかかる武司。突然武司の姿が人からウォーレスに変わった。半人半馬の姿だった。武司は驚嘆し

「何だ！　こりゃ」

ルーノとサリナも絶句している。

「変牙だよ！　全てのものを変化させられる。素晴らしい力だ」

カイザーは陶酔したようなうっとりした表情を浮かべた。

「タケノコ！　何とかして！」

『はい、これでどうでしょう？』

武司は人の姿に戻った。そして椅子から立ち上がりカイザーに向かい合った。カイザーは怪訝な顔をして

「人外の力が働いているようだね。ならこうだ！」

カイザーは凄まじいスピードで動いた。空中からレイピアを取り出し武司の胸をつら――

『させませんよ』

――ぬけず、かわされた。

「ふむ、厄介な相手だね」

カイザーは思案げな表情で呟いた。タケノコのような存在を相手にするのは初めてなのだろう。

29話

『こっちの番です』

武司達はカイザーに攻撃をしかけた。サリナはバルハートを一閃させ、ルーノは小刀でバツの字に切り、武司は逆袈裟切りで攻め立てた。しかしカイザーは最小限度の動きで全てかわした。

「これが無牙だよ。相手の動きが手に取るようによめる」

圧倒的な実力差を武司達は痛感した。このまま戦っても万が一にも勝利を収めることはできないだろうと。武司は額からは冷や汗を垂らしながら良策はないか模索するもアイデアは浮かばない。

『ならこうです！』

カイザーは武司の放った横切りで胸当てごと胸を裂かれ絶命した。

「何ですか？　それには無理があるんじゃないですか？」

カイザーは無傷でぴんぴんしている。カイザーはレイピアを振り髪を掻き分けた。

『作者の神の手が通じないなんて……』

「ハハハ、卑怯な作戦は無――」

その時カイザーの首が両断され赤い血と頭が飛んだ。カイザーの目は見開かれ自分の命を奪った原因を眼中に入れた。それは背中ま

での銀の長髪をゴムで結った男だった。肌は真っ白だ。その男は金属製の胸当てを着けているだけで武器らしき物は携帯していない。カイザーを魔法でしとめたのだろうか。

30話

「やあ！　無事かい？」
銀髪の男は髪をかきあげながら尋ねた。武司は「何とか」と言った。

「僕はルナハ。君達は？」

武司達とタケノコが自己紹介した。

「さっきはどうやってカイザーを仕留めたんだ？」

武司の質問にルナハは右手を挙げた。金色の地に宝石がちりばめられた指輪がそれぞれの指にはまっている。
「僕は目に見えにくい鋼糸の使い手なんだよ。この指輪から糸を出すのさ」

タケノコは遠慮がちに言葉を紡いだ。

『ルナハさん、武司さん達に心牙の手ほどきをしてくれませんか？』

「まあ……いいでしょう。僕でよければ」

「よし、じゃあ教えてよ」と武司。

「ここでかい？」とルナハ。

武司達はそれから二時間ルナハから心牙の基本を教わり、四つの心牙をそこそこ操れるようになった。

「ハアー！」

武司は強牙で切れ味を上げた剣でタペストリーごと壁を切り付けた。タペストリーと石の壁がナイフでバターを切るように裂けた。サリナはバルハートを弓に変えてみせた。

「あはん、出来たわ変牙！」

ルーノは小刀を長剣にした。刃を無から生み出したのだ。現牙だった。

「君達筋が良いよ！　良いハンターになれるよ」

武司達はルナハにお礼を言い別れた。武司達は玄関ホールの外への扉を押し開き快晴の下へ出て行った。雲一つ無い青い空だった。

31話

「お客様方、次の品物は赤い宝石と名高いモンスターグラゲの赤い瞳です。金貨二百枚からスタートです。落札希望のお客様は挙手して落札金額をお伝えください」

ここはオークション会場。舞台には黒いスーツ姿の男がマイクを握って商品の紹介をしている。そして司会者の前のテーブルには赤々とした光り輝くモンスターの目が透明なケースに入れられ置かれている。司会者の前方には何段もある横長な椅子に腰掛けた数百人の豪華な服を着た賓客達が座っていた。皆大金持ちなのだろう。着ている衣服も身につけているアクセサリーも高価そうだ。

「金貨三百枚！」

「金貨四百十枚！」

「金貨五百二十枚！」

「金貨六百枚！」

そこで挙手する客がいなくなった。会場は客のザワザワとした話し声に充ちている。司会者は「ゴホン」と咳をするとホールに響き渡る声でマイクに向かい喋った。

「他に購入希望の方はいらっしゃいませんか？　……では金貨六百枚のお客様にお売りいたします！」

司会者はカンカンと木製のハンマーで木の受け皿を叩いた。落札されたようだ。落札した立派な顎髭を蓄えた青い服装の老人はニッ

コリ微笑み喜びを表した。会場は熱気に包まれている。

32話

武司達一行は舞台から見て右ての隅にいた。その隅は階段になっていて舞台のま反対にある出口に向かう程高くなる。今回はノース国のオークション会場の護衛の任務に来ていたのだ。武司達以外にも武器を持ち護衛をしている人が五十人はいる。皆敏腕のハンター達だろう。辺りを警戒している者が多い。

「金貨千枚！」

「金貨千二百枚！」

相変わらず続くオークション。様々な名品や珍品が次々に出品され落札されていく。主催者側はどうやって品物を調達しているのか気になる。武司はつまらなそうに「フアー」と欠伸をした。

「タケノコ、俺暇だからオークションしてみたいんだけど」

『お金そんなにあるんですか？』

「無いからくれよ」

『仕方ないですね。大盤振る舞いです』

武司の足元でチャリーンと金貨が落ちる音がした。武司は地面から金貨二枚を拾った。

「えー、たった二枚かよ！　何も買えないじゃん」

オークションの司会者が舞台上の右手の幕から運ばれてきた鞘に入った剣を指差し言った。

「今回の目玉商品がやってまいりました。魔剣ウイザード！　魔剣に選ばれし者しか剣を鞘から抜けない伝説級の剣です。この魔剣は強力な魔力を秘めているらしいのです。……試しに……」

司会者は長めの剣の鞘を左手で持ち右手で柄を握り引いた。さらに力強く引く。しかし抜ける様子は微塵も無い。

33話

「いかがでしょうか皆様。気に入ってくださった方は挙手をお願いします。では金貨千枚からスタート」

との司会者の掛け声に客席からは頻繁に腕が上がった。お客さん達は場の雰囲気にのまれているようだ。熱気が武司達にも伝わってきた。

「金貨二千枚！」

「金貨三千百枚！」

「金貨四千二百一枚！」

「金貨七千枚！」

お客様達が声を荒げ言葉を発する。流石伝説の名を冠する剣だけのことはある。しかしこの剣の所持者達が一人ももれることなく数奇な人生を歩んだことはあまり知られていない。どんどんつりあがっていく金額。さくらが混じっているのかもしれない。お客達は次々に手を挙げ金額を口にしていく。そんな時会場のお客が座る席の最後部に一つだけある扉が開き数十人の人が入って来て虐殺を始めた。一人の侵入者の男が指を前に伸ばすと指から小さな丸い空気の玉が無数に発射された。その玉は客や椅子を貫いていく。

「キャーーぐえ！」

「グ、グワー！」

「いだい！　ぐは！」
「ギャー！　血が血が……うげえ！」

圧縮した密度の高い空気の玉を指先から噴射していた男は

「俺らはサンリーマ盗賊団！　野郎供！　この場に居る邪魔者を殺して魔剣を奪えー！」

34話

どうやら腕利きの盗賊団のようだ。ノース国の城門を突破し侵入したのだろう。招かねざる乱入者達は逃げ惑う客を殺し金品を奪いながら殺戮を続けていく。護衛の人々との対決も繰り広げられている。

「俺はサンリーマ盗賊団のルッパだ。お前名は？」

「武司だ。ルッパ、その空気の弾丸は反則級な威力だな」

武司は剣と現牙によって作り出した盾を持っている。ルッパは肩までの長髪を揺らしながら空気弾を乱射していく。武司は盾を変牙により伸縮させながら弾を弾く。オークションの来客者は三分の一が殺され血を流し倒れていた。会場内では剣のぶつかり合う音や騒がしい喧騒がなりやまない。

†

「野郎供！　魔剣を奪った！　脱出するぞ！　サンリーマの兄貴が城門で待ち侘びてるはずだ」

仰向けに倒れた司会者の胸にグッサリと突き刺した剣を引き抜きながら坊主のカナタが言った。

†

「カカカカカン！　カカン」と武司は襲い来る殺傷能力抜群のルッパの攻撃を盾で防ぐ。武司は意識を集中しホールの上部に十本の剣

を現牙で出現させルッパに向け飛ばした。ルッパはそれを見て足場の悪い階段で前宙し転がりかわした。ルッパがあわやというところで移動した石の床には剣が深々と突き刺さっていた。しかし武司の作り出した最後の一本の剣がルッパの首を切り裂いた。

35話

「ぐわ！　……なんてね」

と言うルッパ。彼は首を変牙で空気に変え大きな負傷を防いだ。ルッパは右手を挙げ微笑むと

「武司！　なかなかやるな！　面白かったぜ！　じゃあな！」

ルッパは頭部と肉体を変牙で空気に変え遁走した。流石に空気を止められる者はおらずルッパの逃亡を防げなかった。武司は盾を消しながら舌打ちした。多くの人々の命を無慈悲にも奪ったルッパが武司には許せなかった。ルッパには罪の意識等持ち合わせていなかった。彼は盗賊団のメンバーに育まれ子供の時より心牙の教育を施された。そして生きていくには他者より強い事が必須事項だとすりこまれている。他者を蹴落としてでしか生きていけない……悲しいがそれがルッパだった。

†

「行かさないわよ！」

ルーノは変牙で刀を伸ばし坊主のカナタの胸を狙った。服を裂いた、しかしガキンと音がして弾かれた。見ると胸部が金属に変わっている。とても頑丈そうで破壊は困難に思われた。カナタはニヒルな笑みを浮かべながら

「美しいお嬢さん。今は時間が無いのでね。これでお別れです」

坊主のカナタは無牙でルーノに近づいていく。ルーノは袈裟切り、縦切り、突きを行った。

35話（後書き）

後書きまで目を通してくださりありがとうございますm（＿＿）m

ここまで読んでくれている人いるのかな？　居たら嬉しいな（＾Ｏ＾）（あんまり居ないだろうな……）

最近リアが忙しいので9時頃に更新ができていないですね。ちょっとストレスが蓄積されますね。

もう少しでこの作品は終わる予定です。アクセス数が前作の五分の一（一日、三百）ぐらいとふるわなかったので執筆意欲を出すのに苦労しましたね。最終話まで下書きはしているので後は携帯電話でポチポチと打つだけです。

感想や評価等頂けると大変励みになります。宜しかったらお願いします。では（＾０＾）／

36話

「フフフ！」とカナタは口元だけで微笑した。

ルーノの攻撃は全てかわされた。カナタの無牙の方が上手だったのだ。カナタは「チュッ」とルーノの頬に唇を付けキスをすると体を翻し階段を駆け上がっていく。

「こら！　変態ハゲ！」

ルーノはそう言いながら刀を鞘に収めると水の入った革の袋から水を掬うとカナタに向け投げた。それに一瞥して気付いたカナタは

「うん！？　危な！」

カナタは前転で水を避けた。するとその水は石の床にぶつかると固まり氷になった。変牙で変化させたのだろう。

†

ズバッと最後の一人の青い髪の盗賊をサリナがバルハートで切り倒した。

『被害は甚大ですね』

タケノコの言う通り護衛は二十人が死傷し客は八十人ちかく殺された。武司達と護衛達は亡きがらを外へと運んだ。

「くそ！　俺が居たってのにこの様とわ！」

武司は憤りじだんだを踏んだ。顔は悲痛な表情をしている。自分を深く責めているのだろう。武司の頬にはかすり傷があった。ルッ

パの攻撃で負傷したのだ。他の護衛達は怪我の手当に包帯を巻かれたり止血されている。

「あはん、武司、相手が悪かったのよ。向こうには心牙に精通した人が何人もいたし……」

「……そうだな、ルッパは強かった」

37話

「私なんか、禿にキスされたのよ！」

ルーノは怒り心頭の様子でご立腹だ。彼女の表情の険しさと怒気を孕んだ声音が心情を吐露している。

†

月日は流れた。東から太陽が地上を照らしている。日光はほのかに温かい。今は午前中。大国ノースを南に進む武司達一行。辺りは平地が続いている。傾斜も障害物も無いため歩きやすい。

「歌姫って美人かな？」

武司は弾んだ声で疑問をていした。彼の顔色は明るく期待に満ちた顔付きをしている。オークション会場での悲劇はなりを潜めているようだ。武司はその悲惨な出来事以来心牙の鍛練に余念がなかった。自分の実力の無さを嘆いた結果そうなったのだろう。

『噂では百年に一人の逸材らしいですよ』

タケノコは百年に一人の部分を強調した。

「そうか、俺惚れられたらどうしようかな……」

「あんたなんかが好かれる訳無いでしょう！」ときつい口調でルーノ。

今は涼しい季節。清涼感溢れる風が武司達を吹き抜けていった。
とそこで「ボン」と音がして白い煙りが辺りに立ち込めた。それが晴れるとタキシードにシルクハットを被った男が現れた。その男は四十代ぐらいで立派な長い髭を蓄え

「ケホケホ！　煙玉は強力すぎましたん」

38話

武司達は意識を集中し現牙を発動させ武器を無から作り出した。
武司は剣の先をシルクハットの男に向け述べた。

「あんたは誰だ？　人型のモンスターか？」
武司の言葉には警戒心と敵意が宿っていた。武司はシルクハットの男の動向に注視した。しかしあまり危険性は薄いように感じられた。シルクハットのおじさんは「コホン」と咳をすると言葉を発した。

「私は世界を股にかけるクールなおじさん……。名付けてクーオですたん」

「あはん、目的は何なの？」

とサリナは詰問した。おじさんはシルクハットを脱ぎクルクル回してまた被った。白髪が多い頭髪が見えた。苦労しているのだろうか。

「ここから先に進みたかったら私の出題する問題に正解することですたん！」

「さあ、行こうぜ」

武司達は武器をしまいシルクハットのおじさんの横をすりぬけた。
サリナが「あはん、ごめんなさいね」と言った。武司の腕に縋り付くシルクハットのおじさんは

「あー！　少しだけ、少しだけ取り合ってくださいたん！」

武司はため息を付き立ち止まった。おじさんは笑顔になり快活に質問した。

「では質問ですたん……私の着ている下着はなんでしょうかたん？」

39話

「くだらねえなーおい。そんなことの為に呼び止めたのかよ」

武司は両手を腰に当て盛大にげんなりした。おじさんの質問の内容がくだらなすぎた。武司達は仕方なく惰性でおじさんの話の続きを耳にした。

「正解したら金貨五十枚プレゼントですたん」

武司は目の色を変えやる気のある声で述べた。

「え、五十枚も？　俄然やる気でてきたぜ。……うーん、ブリーフかな？」

サリナは妖艶な声音で

「あはん、私はトランクスよ」

「意外性をついてフンドシかな」

ルーノは小首を傾げながら解答した。

『皆さん甘いですよ。このおじさん見た目以上の変わり種ですよ……。答えはブラジャーとティーバックです』

タケノコの答えを聞き動揺する武司達。謎のおじさんはいかなる下着を着用しているのか注目度が上がった。シルクハットのおじさんは「では」と言うと脱衣し始めた。そして上着を脱ぎさり下着姿になった。男らしい胸板をブラが隠し男性のシンボルを赤い花柄の

ティーバックが被っていた。ティーバックの全面は盛り上がっている。

「うえー！　なんで女性用！」

「あはん、痛いおじさんね……」

「ただの変態じゃない！」

三者三様の感想を述べる武司達。みんな気力がダウンした。武司達は複雑な表情をしている。

40話

タケノコの活躍により武司達は金貨五十枚をゲットした。だがあまり喜べなかった。なぜなら金貨はおじさんの履いていたショーツから取り出されたためだ。人肌の体温によりほのかに温かい金貨だった。その金貨は武司が持つことになり腰に下げた袋に入れた。シルクハットのおじさんはその後煙玉を使い「けほけほ」とむせながら姿をくらました。武司達パーティーはひたすら南に歩いた。モンスターを倒しつつ進む。そして一時間もすると前方に城塞都市が見えてきた。都市の外壁の外にある畑は荒れ放題で雑草は山のようにはびこっている。城壁はいたるところが崩れており亀裂も幾つも走っている。武司達は風雨に曝され変色し穴だらけの橋を渡って廃墟とかした都市に潜入した。今回の任務はモンスターに掠われた歌姫の救出だ。この誰も居ない都市に連れ込まれたらしい。そんな時悲しげな音色の歌が聞こえてきた。どうやら女性の美しい歌声のようだ。とても澄んだ声で心が洗われるようだ。

「あ！　あっちだ」

武司達が駆け出そうとしたら半壊したボロボロの民家から三匹のモンスターが現れた。そいつらは目が顔の真ん中に一つあり緑色の肌をした身の丈ニメートル程のモンスターだった。額から細く白い角も生えている。

41話

『ドロールキングですね。弱点は大きな目です』

武司は一呼吸し空中にイメージを重ね剣を三本作り出した。どの剣も実践向けの外装をしている為派手な装飾は施されていない。ドロールキング達は低音の声を荒げながらのそのそと武司達目掛け向かって来た。

「飛べ！」

武司の発した声と共に浮いていた剣がドロールキング達に向け飛来した。三本の剣とも三匹のドロールキング達の目に突き刺さった。「ギエー！」と叫びながらドロールキング達は残っていた建物を崩壊させながら崩れ落ちた。地面にドロールキング達の緑色の血だまりができる。

「さあ進もうぜ！」

「あはん、武司現牙を出現させるの早くなったわね」

「えへへ、まあな」

武司達は壊れたり風化した建物の脇や通れる道を進んだ。通過した直後に倒壊する民家もあり武司達は胆を冷やした。黙々と歩を進めて行くと広場にでた。そこの真ん中には石の魚の口から水を噴き出す噴水があり近くにはいくつかの錆びたベンチが置かれていた。傍の花壇には萎れた花が点々と生えていた。放置され枯れてしまったのだろう。そのベンチには大粒の瞳、すっきりした鼻、ふっくら

したピンク色の唇、金色の背中までの髪の妙齢の美女が腰掛け歌っていた。

42話

今歌っているのは人を応援あるいは鼓舞するような内容の曲だった。武司達は自然とやる気や元気が湧いてきた。不思議な影響力を持ったメロディーだった。万人が万人聞き惚れてしまうだろう歌声をしている。やはりどんなものにも才能があるのだと武司は思った。

「だ、大丈夫か？」

武司がベンチに腰掛けた妖艶な歌姫に近づこうとしたところ数十匹のドロールキングが姿を見せた。彼等は壊れた家屋から奪ったのだろう木材を振り回しながらやってきた。皆武司達をいぬくような鋭い視線を放っている。敵意がひしひしと伝わってくる。多勢に無勢だが戦うしかないと武司達は悟った。

「数が多いわね！」

「一人当たり十匹だな」

「あはん、頑張るわ」

優れた顔立ちの麗人、ルーノは駆け小刀を二本抜くと無牙でドロールキング達のおざなりな強攻を避けながら足を強牙で強化しジャンプし次々にドロールキング達の目を切り刻んでいく。ルーノに切られた一匹は「グガー」と悲鳴を上げながら別のドロールキングと頭をぶつけ合い昏倒する。サリナはゆっくり歩きながらバルハートを変牙で伸縮させどんどんドロールキングの目を潰していく。苦しみ暴れた後に遁走したり死んでいくドロールキング達。

43話

数の上では劣勢を強いられていた武司達だったがあっという間にそれを覆していく。

「はあー！」

武司は声を荒げながら緑色の巨体を誇るドロールキング達を切り伏せていく。一匹のドロールキングが角材を横なぎに振り武司に迫る。武司は後ろに跳んでそれをかわし、空振りして態勢をくずしたドロールキングの目を切り裂いた。鮮血が飛ぶ。武司は始め勝算があるのか疑問だったが自分達が強いのかはたまたドロールキング達が弱かったのか……どちらかの為圧勝できた。地面には数十体のドロールキングの死体が転がっていた。生き残ったドロールキング達は仲間を一蹴された恐怖感からか走って撤退していった。とそこで妙齢の歌姫が歌うのを止めた。そして金髪の歌姫はベンチから腰を上げ武司に近づき抱き着いた。腕を武司の腰に回す彼女。武司は照れ笑いをしたが満更でもなさそうな雰囲気を放っている。

「ありがとう助けてくれて。あなたの勇姿に一目惚れしちゃった……キスしましょう……」

と容姿端麗な歌姫は目をつむり唇を突き出す。

『嫌な予感がします！　武司さんがこんなに簡単にモテるはずがない！』

「作者、失礼だな。俺だってたまには惚れられたりするんだよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2637w/

作者の手によって異世界へ飛ばされました（涙）

2011年10月12日10時58分発行